

# はじめに

2003年に環境学習都市を宣言し、まもなく20年を迎えます。環境学習を通じた持続可能なまちづくりを目指して、エコカード活動などを全市的に継続実施してきました。

都市部にありながら、山・川・海に豊かな自然を有する本市の環境特性を活かし、毎年、EWC(地球ウォッチングクラブ)活動の一環として多くの児童を対象に自然観察などの活動をサポートしてきました。

本環境学習サポートガイドは、環境学習都市として本市の地域特性を活かした各種体験活動を

を先生方とともに協働して児童に対し提供することを目的としています。現代的な諸課題の一つとしての環境に関する教育についても教科等横断的な取り組みが求められています。

児童の皆さんが、小学校の6年間に自然体験・生活体験・社会体験といった基礎体験を継続的・統合的に積み上げることで「生きる力」を育み、持続可能な開発目標(SDGs)など社会的課題に積極的に取り組む主体へと成長していただけることを願っています。

# 学校・家庭・地域との連携を促進するEWC活動

## 1 地球ウォッチングクラブ(EWC)が目指していた活動理念

1992年の国連地球サミットと同じ年に始まった地球ウォッチングクラブ(EWC)の活動の目的は、自分たちの住んでいる西宮で地域と暮らしを見直す活動(地球ウォッチング)を行うことで地球市民として地球環境を守る責任を果たすことでした。

この草の根活動は、地球大好き、自然大好き、人間大好きな市民が自発的に行う活動です。

持続可能な開発目標(SDGs)の実現に向けて、誰一人取り残さない社会をつくる責任が全ての人々に課せられています。

環境学習都市として、学校・地域・家庭が一体となってアースマインドを育てていきましょう。

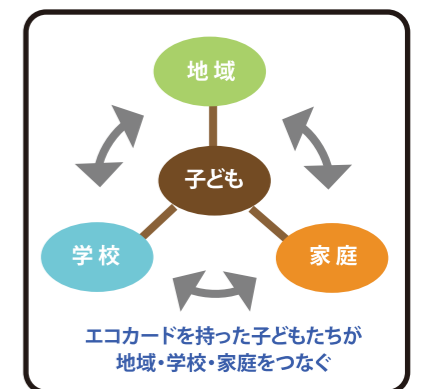


## 2 持続可能な地球づくりに向けたEWC活動

1998年に始まったエコカード活動は、EWC活動の活動を発展させ、地域・学校・家庭を結ぶ全市レベルでの環境学習活動として始まりました。地球環境を守る「アースレンジャー」を目指してエコスタンプを集める活動です。

今後、学校教育の基盤となる「学習指導要領」が社会に開かれたものとなっていくためには、地域社会や家庭との連携が必要となります。

エコカードを持った子ども達が、学校で、地域で、家庭でエコ活動を通じて社会をゆるやかにつないでくれています。



## 3 持続可能な開発目標(SDGs)

SDGs(Sustainable Development Goals)は、2015年9月の国連総会で採択され、2016年から2030年までの国際社会共通の以下の17の目標を定め、全ての国や地域で目標達成に向けた取り組みを進めることを求めています。学校においてもSDGsについて学び、主体的なチャレンジが行われることを願っています。



# 目次

学校・家庭・地域との連携を促進するEWC活動	P.2
生きることは学ぶこと、学ぶことは生きること —学習指導要領を学校・地域・家庭の共通の教育理念として—	P.3
教科等の特質に応じた体験を伴う学習活動	P.4
五感を使ったリアルな学びの機会を体験活動で	P.5
基礎体験の視点から見た教科・単元、EWC活動	P.6-10
体験活動ができる公共施設及びフィールド紹介	P.11-12
甲山自然環境センターでの体験活動と教科のつながり—5年生—(例示)	P.13-14
地域と地球を結ぶ地球ウォッチング(体験活動)の例示	P.15
地域を知り、地域を楽しみ、地域を愛するためのキーワード	P.16-18
地球と社会、地域のつながりを時間軸で理解するための歴史年表	P.19-22

文部科学省では、国内外で進行する急激な社会経済状況の変化に対応し、学びを人生や社会に活かそうとするとともに持続的な社会を担うことが出来る人材の育成を目的に学習指導要領の改訂を行いました。

何を学ぶかではなく、何ができるようになるかに注視した今回の改正では、生きる力の育成に向けた具体的方策として「資質・能力の3つの柱」を提示しています。

「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況に対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」「学びを人生や社会に活かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養」の3つの柱を学校教育の中で実現していくために家庭や地域社会との連携・協働も呼びかけています。

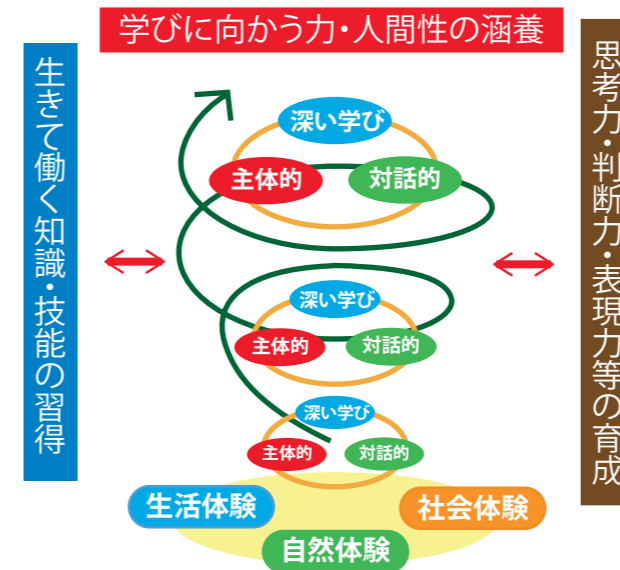
「習得・活用・探究」といった学びのスパイラル発展を実践していく上で、学び方の視点として提示された「主体的・対話的で深い学び」について児童の学習活動支援に関わるものは共通の認識を持っておく必要があります。

「社会に開かれた学習指導要領」といった考え方も示されており、これまでとは違い家庭や地域の関係者もその内容を理解しておかなければなりません。

「3つの柱」の中の「学びを人生や社会に活かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養」については、子どもから大人までの全ての人々が考え、実践していかなければならないことがらです。児童のみならず、支援する側の大人にとっても自分事として不可欠な視点だと言えます。

学びに向かう力・人間性の涵養に向けた取り組みを進めるには、単元や教科等を横断するとともに、学年を越えた長期的な見通しも求められます。「主体的・対話的で深い学び」をPDCAサイクルに基づく継続的な学びのスパイラルに位置づけておきましょう。

カリキュラムデザインの考え方



主体的な学びの視点

- 学ぶことに興味や関心を持ち
- 自分のキャリア形成の方向性と関連付けながら
- 見通しを持って粘り強く取り組み
- 自己の学習活動を振り返って次につなげる

対話的な学びの視点

- 子供同士の協働
- 教職員や地域の人との対話
- 先哲の考え方を手掛かりに考える等を通じ
- 自己の考え方を広げ深める

深い学びの視点

- 取得・活用・探究という学びの過程の中で
- 各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら
- 知識を相互に関連付けてより深く理解したり
- 情報を精査して考えを形成したり
- 問題を見いだして解決策を考えたり
- 思いや考えを基に創造したりすることに向かう

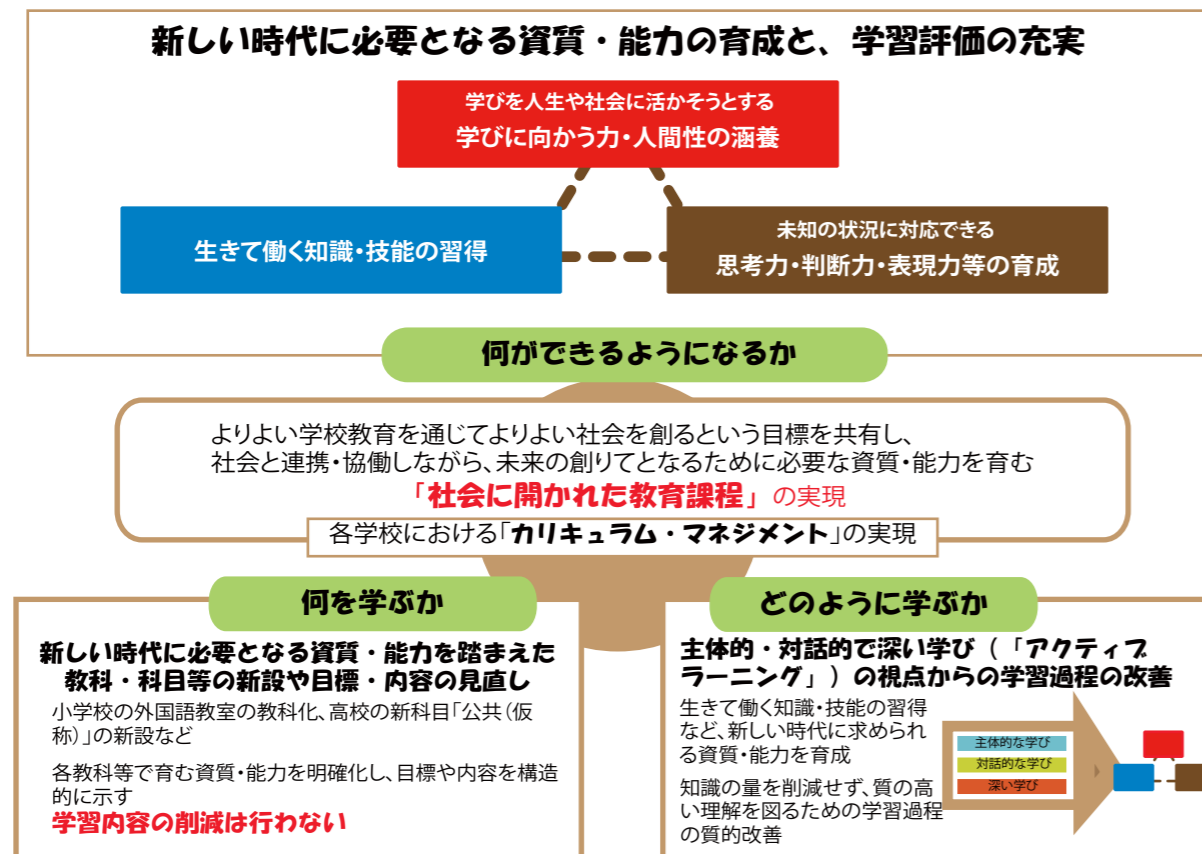
自然体験・生活体験・社会体験を総合的に意識化できるよう、個々の体験活動のつながりを整理しておきましょう

**事前の動機付け** → **個人の調べ学習**  
 ・課題の投げかけ  
 ・事前の話題提供  
 ・個人の調べ学習  
 ・活動への期待・思いのまとめ

**体験を認知し、経験知とするために**  
 ・体験活動を通じて多様な思いや考えに触れてみる  
 ・体験を「体験」に止めず、経験知とするために対話的な学びの視点を取り入れてみる



学習指導要領改訂の方向性



学校教育法の目的や目標を実現するために文部科学省が、2016年に作成した学習指導要領改訂の方向性についてまとめた概念図です。